

埼玉県における古墳時代前期の玉作り

赤熊 浩一

要旨 埼玉県東松山市の反町遺跡からは、水晶、緑色凝灰岩、瑪瑙を素材とする古墳時代前期の玉作工房跡が発見された。また、集落内の竪穴住居跡からはガラス小玉の鋳型も出土している。さらに、反町遺跡に近接する東松山市高坂 8 号墳の主体部からは、水晶製勾玉と緑色凝灰岩製管玉が出土している。こうした様相は、これまで出雲や北陸地域を中心に生産されていた玉が、古墳時代前期になると生産拠点が各地に拡散したと捉えることができる。そこで、本論では、水晶製勾玉の分析を通して、埼玉県における古墳時代前期の玉作りとその背景について考えてみる。

1 はじめに

埼玉県東松山市の反町遺跡は、水晶・緑色凝灰岩・瑪瑙を素材とする玉作工房跡やガラス小玉鋳型が発見され、古墳時代前期の玉作り遺跡として知られている。遺跡は、荒川の支流である都幾川の沖積地に位置する集落で、東海、畿内、尾張、丹後、吉備、北陸、山陰などの外来系土器が出土している。集落内の河川跡からは、大規模な灌漑水路や堰跡などの施設も発見され、木製農耕具も多数検出された。外来集団の影響が色濃く見られ、都幾川流域の低地開発を大規模に行った拠点集落と考えられる。また、反町遺跡の周辺には、前方後方墳が築造された諏訪山古墳群や高坂古墳群が存在する。さらに、都幾川を挟んで対岸には、前方後円墳の野本將軍塚も存在する。こうした玉作り、外来系土器、灌漑施設、前方後方墳の様相は、関東地方における古墳時代前期の低地開発の特徴として考えることができる。

また反町遺跡周辺には、高坂古墳群、諏訪山古墳群、毛塚古墳群、柏崎古墳群、根岸裏古墳群が形成され、これらの古墳群には規模の違いこそあれ、高坂 8 号墳、諏訪山 29 号墳、毛塚 1 号墳、柏崎 10 号墳、根岸稲荷神社古墳などの前方後方墳が築造されている点が注目される。

2 古墳時代前期の玉作り遺跡

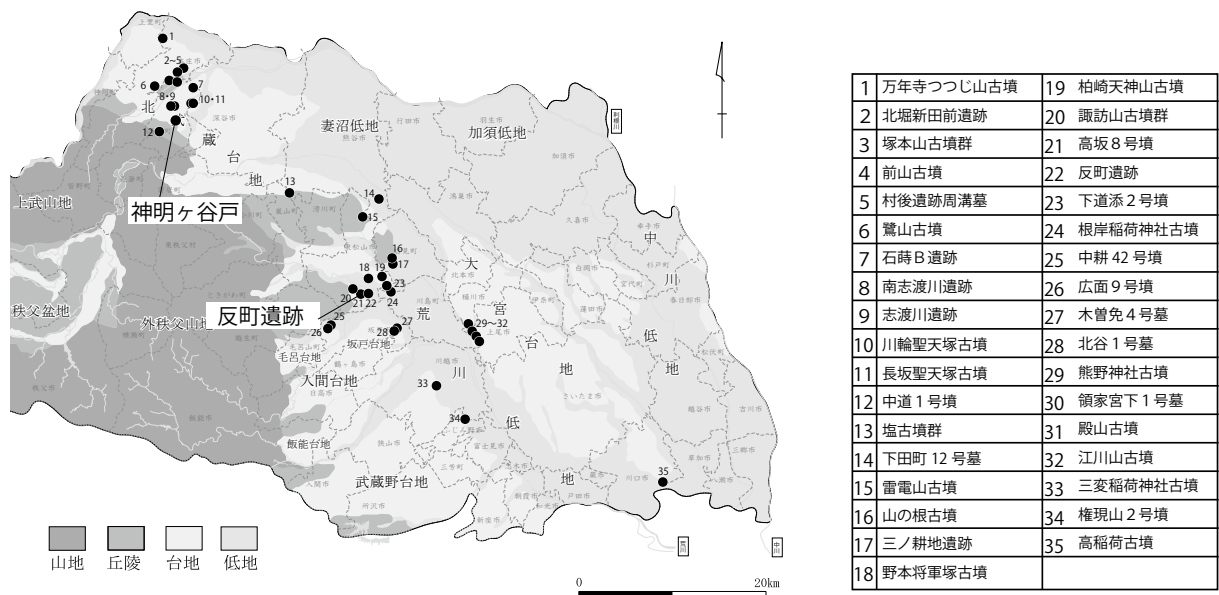
(1) 玉作り遺跡

埼玉県内には、東松山市反町遺跡、桶川市前原遺跡、川島町正直遺跡で古墳時代前期の玉作り遺跡が発見されている。玉作り技法については、上野真由美・大屋道則によって分析が行われている(上野 2011、上野・大屋 2014)。

反町遺跡

反町遺跡からは、水晶製勾玉、緑色凝灰岩製管玉、瑪瑙の剥片が出土した工房跡が 2 軒発見されている。この内の第 48 号竪穴住居跡とした工房跡は、長辺 5.11m、短辺 4.11m、深さ 0.30m の方形をした竪穴遺構である。工房跡の床面には、おびただしい水晶や緑色凝灰岩の剥片が散った状態であった。こうした状況は、工房内で工人が石材の大きさを整えるため、表皮面を押圧剥離、打撃を加えて器面を整える敲打を行ったときの剥片が埋もれたものと考えられる。

工房内での作業は、中央から南側にかけて剥片が散乱していること、南東コーナーに設けられた工作用ピットから、長さ 30.3cm の緑色岩材質の磨き砥石と長さ 12.20cm の緑泥片岩材質の玉砥石、鉄針が検出されたことから、工作用ピットを中心に行われていたと考えられる。

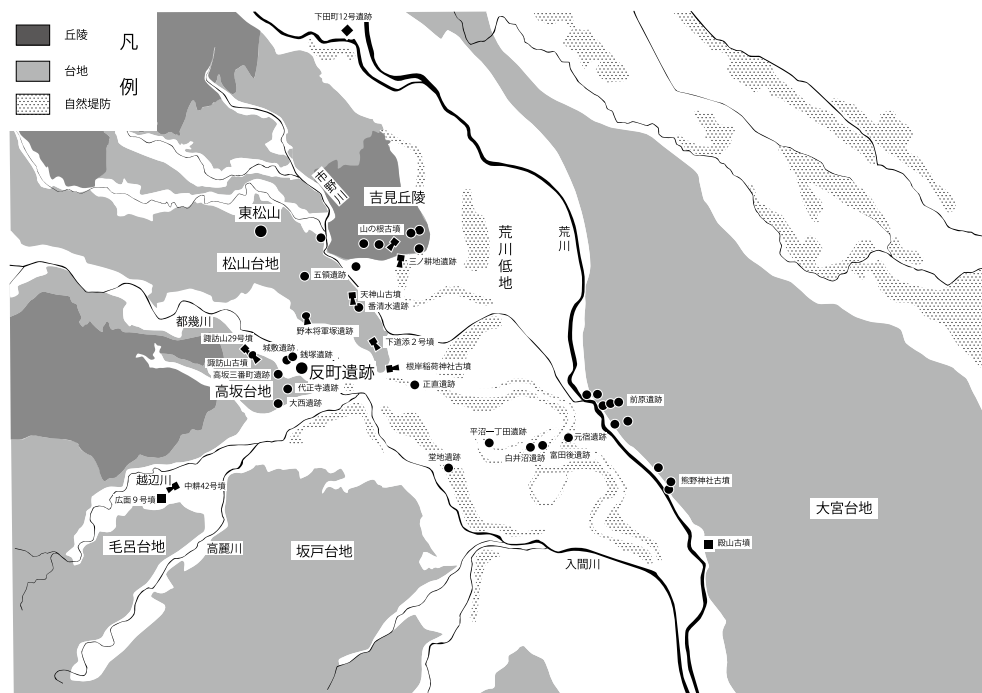


第1図 埼玉県における古墳時代前期の古墳分布と反町遺跡 (青木 2016)

	反町	比企	北足立	入間	大里	児玉
250	1期 22軒	三ノ耕地2号 山の根 三ノ耕地1号 諏訪山29号	前方後方墳	権現山2号 中耕SR42	前方後円墳 前方後方墳 円墳 前方後方形周溝墓	南志渡川4号墓
300	2期 85軒	柏崎天神山 高坂8号	熊野神社		塩7号 塩1号 塩2号	鷺山
400	3期 87軒	高坂諏訪山 野本將軍塚	高稻荷 前方後円墳	三変稻荷神社	円墳	長坂聖天塚 川輪聖天塚

君島勝秀編 2010 『「稻荷山」出現以前の古墳』さきたま史跡の博物館 を一部改変して作成

第2図 各地域における古墳の変遷 (青木 2016)



第3図 古墳時代前期における東松山市周辺の遺跡

また北西コーナー寄りの小穴からは、水晶の石材が三個並んで出土した。この水晶は、上下の両端に打撃を加え一次加工が行なわれた角柱状であった。さらに、西壁寄りには研磨途中の未成品や穿孔に失敗した廃棄品が残されていたことから、製作途中の石材の保管場所と考えられる。

勾玉製作工程（第5図）は、六角柱の結晶体をD字形に剥離する。大きな結晶体は分割して素材を造り、D字形に近い形状にする。敲打と粗い研磨によって、版状のD字形に整える。次に、腹部を敲打と粗い研磨を加えて挟み、C字形の版状に加工する。加工後に、孔を穿ち、更に敲打と粗い研磨で勾玉形に面取り整形を行い、最後に仕上げの研磨を行って完成させる（注1）。また、勾玉の加工は高い技術力が必要で、専門の製作者が行っていたとも分析している。

管玉製作工程は、あらかじめ原石を打ち割り、板状に加工された未製品を素材とする。このため、工房内から原石は検出されていない。板状の未製品を敲打によって角柱状の形状にする。更に、細かな調整や敲打を加え、角柱状に整える。研磨は荒砥・中砥・仕上げ砥の段階が想定され、荒砥は角柱の上下面と四側面を研磨する。中砥は角柱状の角を研磨し、多角柱の形状にする。穿孔は中砥を施した後に行われ、穿孔後に仕上げの研磨を行って完成させる（上野 2012、2014）。

素材となる水晶は、棒状の不純物が含まれていることから、山梨県甲州市などで産出する草入り水晶と呼ばれている水晶を手に入れ加工したと考えている。また、緑色凝灰岩は、反町遺跡から北西約5kmの地点で、都幾川の上流にあたる東松山市葛袋に産地を求めることができる。

前原遺跡

前原遺跡は、荒川低地を見下ろす荒川左岸の大宮台地西縁に位置する。第2号住居跡から水晶製未製品、緑色凝灰岩製未製品と瑪瑙製未製品が出土した。玉類の遺物は間仕切り溝の内側に集中

し、住居跡のほぼ1/4の範囲から出土している。勾玉未製品集中とした床面直下の浅いピットの中から水晶14点、瑪瑙1点が埋納されていた。製作技法は反町遺跡と類似する（第6図）。

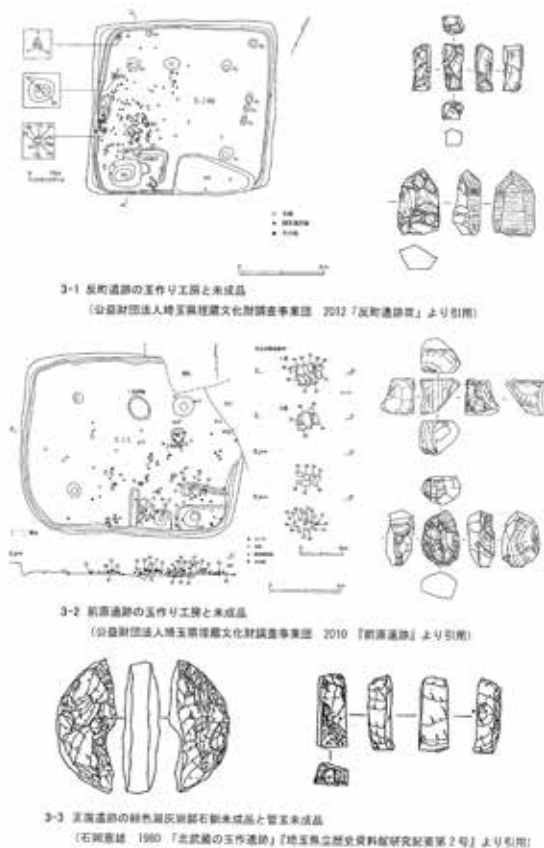
正直遺跡

正直遺跡は、荒川低地の自然堤防上に位置する。農業用送水管を埋設する工事で発見された。玉類未製品は緑色凝灰岩製管玉未製品106点と釧未製品1点である。また、片岩質の内磨き砥石1点も検出されている。正直遺跡の管玉未製品は、形割から側面打裂が行われた角柱状に加工された状態で、長さ2.0cm～6.0cmの大型品である。

（2）緑色凝灰岩の産地

各遺跡出土の緑色凝灰岩製管玉未製品と東松山市葛袋から産出する珪質の緑色凝灰岩をX線回析によって鉱物組成を調べ、相互の関連性を検討した（注2）。分析対象資料は反町遺跡出土資料2グループ（A・B）、桶川市前原遺跡出土資料1グループ（A）、川島町正直遺跡出土資料2グループ（A・B）、東松山市葛袋産出地資料4グループ（A・B・C・D）である。分析を行った大屋は、その結果について、正直A・反町B・前原A・葛袋Bグループは石英とモルデン沸石が含まれている点の特徴で共通している。ただし、露頭採取の葛袋Bにはオパールaが検出され、正直A・反町B・前原Aグループの遺物にはオパールaが見いだせず、風化によって溶質した可能性を指摘している。また、反町Aグループには石英と斜方チロル沸石が含まれ、葛袋Cグループには石英と斜方チロル沸石、モルデン沸石、オパールが含まれ類似している。さらに、正直Bグループには石英と緑泥石が含まれていることから葛袋または他所からの搬入を指摘している（第9図）。

このことから、反町遺跡、前原遺跡、正直遺跡の緑色凝灰岩の素材は、葛袋産出地から入手したことが明らかにされた（注3）。



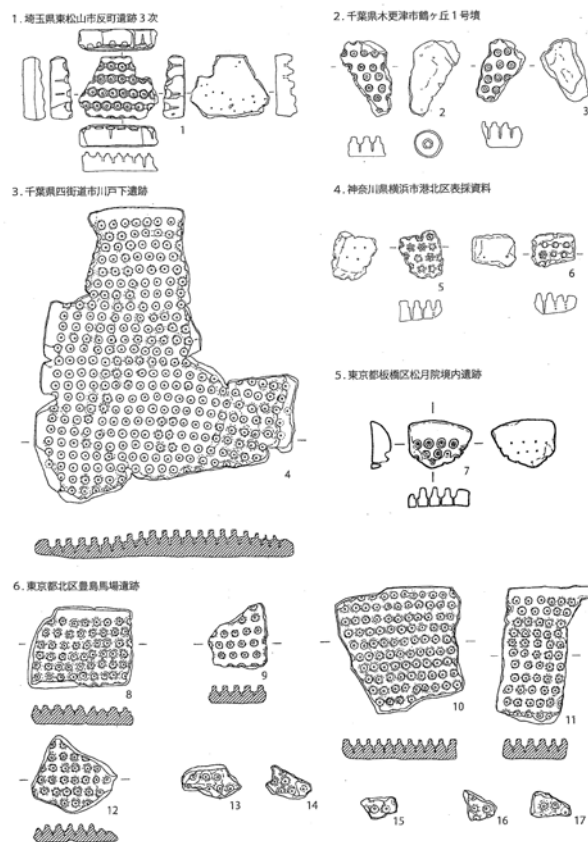
第4図 玉作り工房跡と出土未成品（山田 2015）

	途上品・終了品	保留品	破損品	廃棄物
1 未調整				
2 調整				
3a 終打・粗目研磨a				
3b 同b				
4 穿孔				
5 同c				
6 光沢研磨				

第5図 反町遺跡出土主要遺物の配列（上野 2014）

	途上品・終了品	保留品	破損品	廃棄物
1 調整前				
2 調整中				
3a 調整後・粗目研磨				
3b 同b				
4 穿孔				
5 同c				
6 光沢研磨				

第6図 前原遺跡出土主要遺物の配列（上野 2014）



第7図 各遺跡出土のガラス小玉鋳型

3 水晶製勾玉の出土遺跡

(1) 水晶製勾玉の出土遺跡

埼玉県内の古墳時代前期における水晶製勾玉は、比企地域の東松山市内の反町遺跡、高坂 8 号墳、八幡遺跡と児玉地域の美里町神明ヶ谷戸遺跡から出土している（第 11 図）。

反町遺跡からは、工房跡の第 48 号住居跡と第 268 号住居跡から勾玉未製品が検出されている。第 268 号住居跡のものは、腹から尾部にかけての破片である。稜線の角が残った仕上げの研磨段階の未製品である。

高坂 8 号墳は、反町遺跡の所在する都幾川の沖積地を東側に臨む高坂台地の縁辺に立地する。残存する墳丘は、径約 19 m、盛土は、整地された基盤層の上に、墳丘外縁に暗褐色土、その内側にロームブロックを多量に含む黄～褐色土を充填する構造である。墳頂から 80cm 掘り下げたところから、勾玉 1 点、管玉 15 点、振文鏡 1 点、鉄製ヤリガンナ 1 点が出土した。主体部の形状は不明確であるが、わずかに棺床面の硬化面と炭化物の分布範囲が捉えられ、長軸 4 m、短軸 82 cm 程度の主体部を想定している。周溝が方形に巡ることから、前方後方墳とされた。築造時期は、墳丘直下の住居跡が 4 世紀中葉であること、振文鏡が 4 世紀中頃に国内で生産された仿製鏡であることなどから、古墳時代前期の 4 世紀後半と考えられている（注 4）。

水晶製勾玉の大きさは、長さ 28.62mm、頭部で厚さ 9.30mm、重さ 6.10 g である。片側穿孔の C 字型で、頭頂部にわずかに欠損が認められる。外縁は丸味をもち頭部側の背にわずかな稜線が残る。内縁は内磨き砥石の研磨痕がわずかに残り、両先端に稜をもち、下部先端は細く突き出ている。

八幡遺跡第 8 次調査では、第 3 号住居跡の床面直上から水晶製勾玉が 1 点出土した。勾玉は下部の先端基部のみで、残存する長さは 7.00mm ある。住居跡の時期は、出土遺物から 4 世紀後

半とされている。いずれも反町遺跡から供給された玉類の可能性が高いと考えられる。

美里町神明ヶ谷戸遺跡は、小山川、志戸川流域を中心として、古墳時代前期の古墳が多く存在する児玉地域に位置し、前方後方形周溝墓で知られる美里町の村後遺跡、塚本山古墳群、南志戸川遺跡、深谷市の石蒔 B 遺跡がある。また、児玉町鷺山古墳は 4 世紀の前方後方墳である。

神明ヶ谷戸遺跡は、古墳時代前期の方形周溝墓 7 基と円形周溝墓 1 基が調査されている。この内の第 8 号方形周溝墓は、盛土の高さ 2 m、一辺の周溝は長さ 20.5 m、溝幅 2.5 m と大規模である。周囲は削平を受けていることから正確な墳形は不明だが、方墳の可能性もある。埋蔵施設は 4 箇所発見され、主体部からは勾玉 2 点、管玉 6 点、丸玉 1 点、小玉 2 点が出土している（第 11 図）。勾玉は水晶製 1 点と滑石製 1 点である。水晶製勾玉の大きさは、長さ 24.35mm、頭部で厚さ 7.53 mm、片側穿孔の C 字型である。高坂 8 号墳出土の水晶製勾玉と比べ、小型で丸味があり、仕上げの研磨が丁寧な印象をもつ。また、背や内側の両単位に明瞭な稜線が見られない。滑石製勾玉の大きさは、長さ 9.87mm、頭部で厚さ 6.10mm、片側穿孔の C 字型である。

玉製作は反町遺跡とは法量的に異なることから、搬入もしくは、他の工房跡で製作された可能性も考えられる。

(2) 水晶製勾玉と共伴する管玉の法量分析

管玉は、一般的に素材から花仙山産碧玉、緑色凝灰岩、滑石、瑪瑙、水晶、ガラス製などに大別される。また、法量的な違いも合わせ、生産地や時期を反映していると考えられる（大賀 2012）。山陰系は花仙山産碧玉を素材とし、北陸系は淡緑色～淡緑灰色で均質な緑色凝灰岩を素材とする。当初は直径 2 ～ 3mm 程度の細形管玉を主流としていたが、太形管玉の素材に特化した材質（大賀 材質 2）の開発によって法量に時期的変化が認め

られると大賀は指摘している（注5）。

水晶製勾玉と共伴する高坂8号墳と神明ヶ谷戸8号周溝墓出土の管玉について法量分析を試みた。

高坂8号墳出土の管玉は、緑色凝灰岩製とみられる。法量は、長さ10.31～22.22mm、厚さ2.84mm～4.29mmで細長く小型である。石材の色調は、肉眼観察では淡緑色、白緑色、緑色である（注6）。

神明ヶ谷戸遺跡出土の管玉は、緑色凝灰岩製4点と滑石製2点である。管玉の大きさは12.00～27.56mmである。穿孔は、両側と片側がみられる。

管玉の法量分布をみると、高坂8号墳出土の管玉は、小型で、細形の北陸系管玉であることが分かる。畿内系や山陰系の分布範囲とは異なっている。また、神明ヶ谷戸8号周溝墓出土の管玉は、法量差が認められ、北陸系を含みながら、中間的な分布範囲である。この分布範囲は、大賀が分析した神奈川県平塚市塚越古墳出土の管玉の法量分析の範囲と類似し、この分析を通して大賀は、生産地を示す直接的な証拠に欠けるが畿内周辺での生産を想定している。一方で、滑石製管玉の分析において、同じ分布範囲の領域について関東系を提唱していることから（大賀2012）、神明ヶ谷戸の緑色凝灰岩製管玉も材質の差異はあるが、法量的に関東系の可能性を考えたい。米田も石材の指向性と穿孔技術から管玉は北陸、勾玉は出雲の影響を少なからず受けていると述べている（米田2009）。今後、関東における古墳時代前期の管玉の素材と法量による検討を重ね明らかにしたい。

（3）関東出土の水晶製勾玉

埼玉県内で水晶製勾玉が出土した遺跡は、東松山市反町遺跡、高坂8号墳、八幡遺跡、美里町神明ヶ谷戸8号墳である。関東地域では、茨城県筑波市面野井11号墳、千葉県八千代市間見穴2号墳、山武町島戸境1号墳、市原市新皇塚古墳、木更津市俵ヶ谷4号墳、多胡町多古台1号墳、

神奈川県真土大塚山古墳、山梨県甲斐鉾子塚古墳、静岡県焼津市小深田西古墳、藤枝市若王子1号墳、釣瓶落14号墳、東浦1号墳、東山6号墳である。

水晶製勾玉が出土する地域は、いずれも古式古墳が築造される地域である。埼玉県内でも、高坂8号墳は前方後方墳であること、神明ヶ谷戸8号墳は方墳とみられる。

島戸境1号墳からは、捩文鏡2面、内行花文鏡1面、珠紋鏡1面、硬玉勾玉3点・水晶勾玉2点・瑪瑙勾玉5点・琥珀製勾玉2点、緑色凝灰岩製管玉35点、水晶製棗玉4点、琥珀製丸玉2点、ガラス小玉200点が出土している。築造時期は4世紀後半と考えられている。俵ヶ谷4号墳からは、埋葬施設が2基検出され、第1主体部からは碧玉管玉3点、ガラス小玉49点、鏡片が出土し、第2主体部からは、水晶製勾玉1点、碧玉製管玉11点、ガラス小玉19点が出土した。また、墳丘下の旧表土面から捩文鏡1面が検出されている。

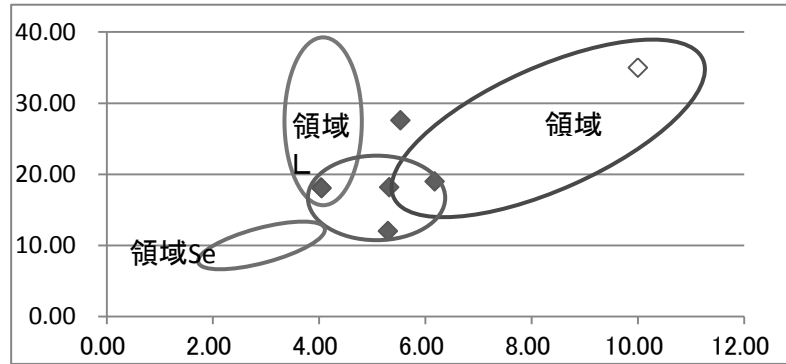
熊野神社古墳からは、硬玉勾玉4個、瑪瑙勾玉個、瑪瑙棗玉1個、碧玉算盤玉1個、碧玉管玉67個、瑠璃小玉10個、碧玉石釧6個、筒型銅器1個、碧玉巴型石製品2個、碧玉紡錘車4個、滑石紡錘車1個、碧玉筒型石製品4個が出土している。この他にも、直径12cmの鏡一面、刀剣数本、白い勾玉などが発見されたが、現在も行方不明のままになっている。この白い勾玉とは水晶製勾玉の可能性も考えられ、熊野神社古墳にも副葬され、玉作工房跡が発見された前原遺跡との関係を指摘できる。築造年代からも4世紀後半であることから、玉への指向性も十分一致する。

4 関東のガラス小玉鑄型

反町遺跡第206号住居跡の覆土中からガラス小玉鑄型が検出された（第7図）。共伴する土器から4世紀中葉と考えられる。鑄型片は、縁辺が割れていて、残存する長さ3.5cm、幅4.4cm、厚さ1.2cmである。孔は横方向に連続して開けら

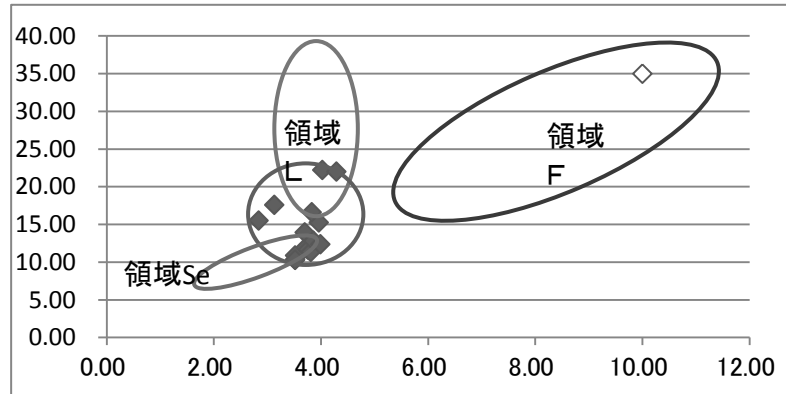
神明ヶ谷戸8号周溝墓

番号	幅mm	長さmm
k1	6.18	18.95
k2	5.53	27.56
k4	5.32	18.14
k6	5.30	12.00
k3	4.04	18.10
k5	4.05	18.00



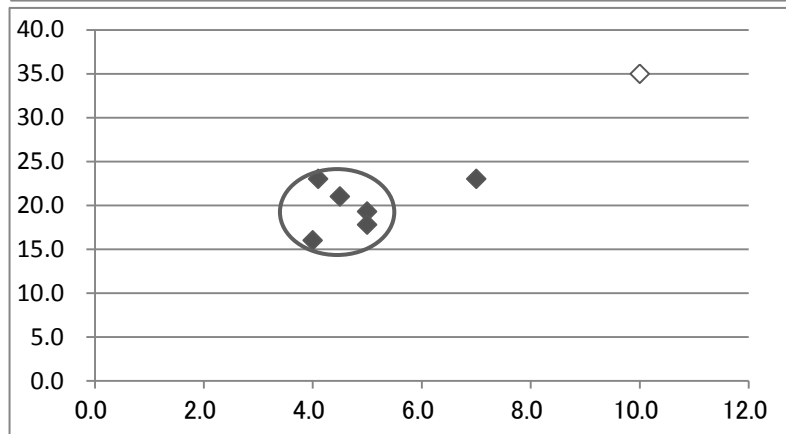
高坂8号墳管玉計測値

番号	幅mm	長さmm
428	4.03	22.22
427	4.29	22.00
427	3.69	11.74
227	3.96	15.24
228	2.84	15.50
229	3.70	13.91
230	3.76	11.64
231	3.81	11.33
232	3.86	12.83
233	3.99	12.37
234	3.83	16.58
235	3.52	10.26
236	3.52	10.87
237	3.52	10.31
238	3.13	17.58

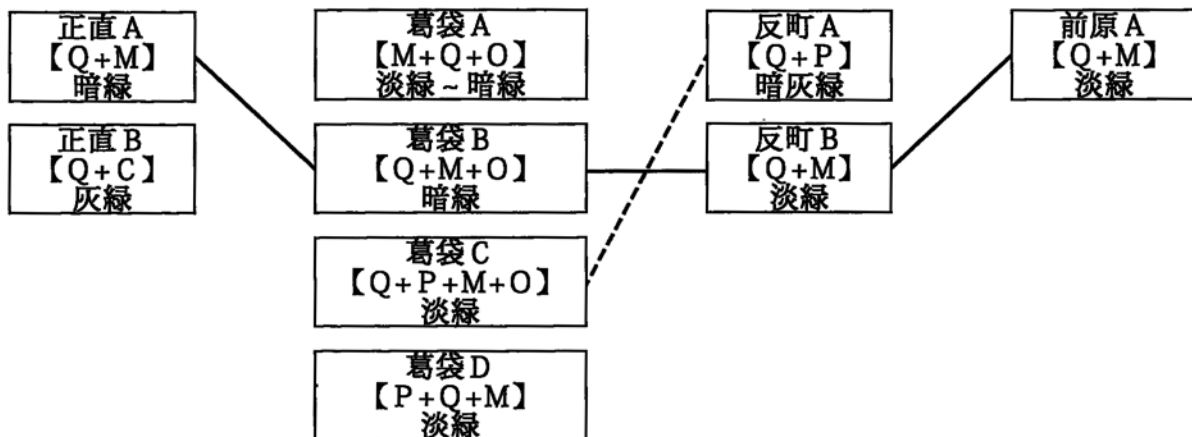


鍛冶谷・新田口遺跡

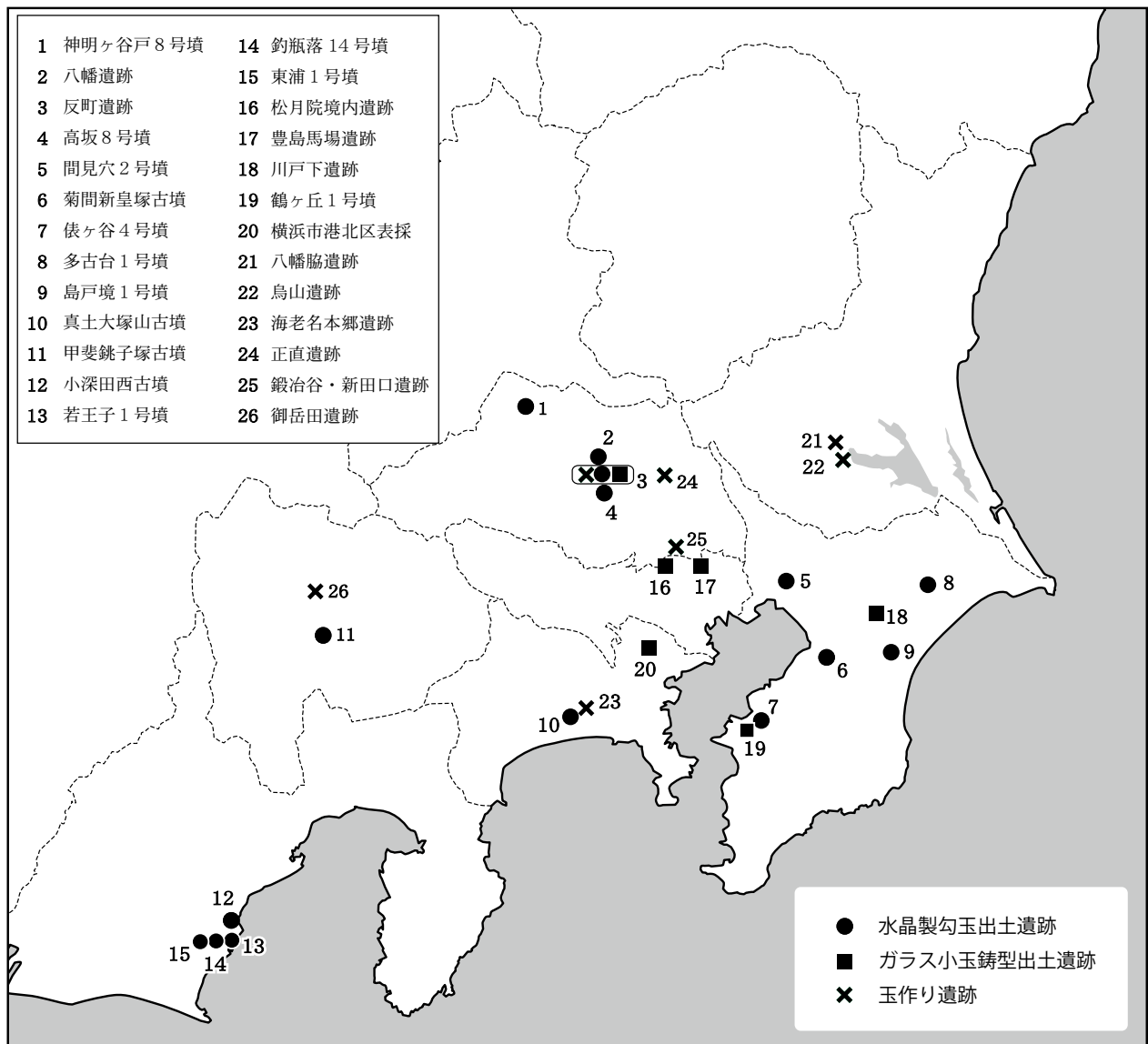
	幅mm	長さmm
214-1	5.0	19.3
214-2	5.0	17.8
280-1	4.1	23.0
280-2	7.0	23.0
043-6	4.5	21.0
038-3	4.0	16.0



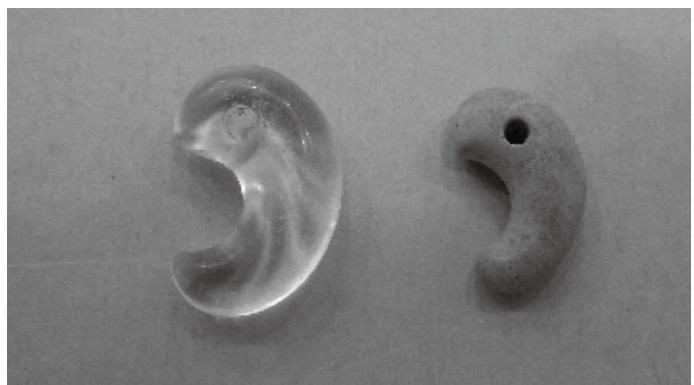
第8図 管玉の法量分析



第9図 埼玉県内の出土の緑色凝灰岩製遺物と県内産出原石との鉱物組成の対比模式図



第 10 図 古墳時代前期の玉作り関連遺跡分布図



第 11 図 水晶製勾玉（左：高坂 8 号墳・八幡脇遺跡 右：神明ヶ谷戸 8 号周溝墓出土）

れ、孔の上端が横方向で連結し溝状となっている。これは同時期の鋳型には見られない特徴である。型孔の開口部の径は0.4～0.5cm、底面部の径は約0.4cmである。表面が風化しているため、開口部分がやや広がっていると考えられる。軸孔の径は0.1～0.15cmである。孔が詰まった状態で、X線写真と合わせ実測したもので、軸孔の深さについては、多くが不明であるが、X線写真や割れ口部分から、軸孔は裏面まで貫通していないことがわかる。型孔は、痕跡も含めると33個が器面に残されていた。裏面は平らに整形されるが、器面が風化しているため、整形痕は認められなかった。また、遺物は上部から下部にかけて厚くなっていくことが観察できる。器面の色調は、表面が褐色なのに対し、裏面は灰褐色で火を強く受けたため裏面の色調が変化したと考えられる。

ガラス小玉鋳型を用いたガラス小玉の製作は、未加工のガラスの流通が確認されていないことから、舶載されたガラス小玉が原料として使用されたと考えられる。反町遺跡出土資料においては、紺色透明を呈するガラス小玉と、鋳型内に付着していたガラス片の化学組成が極めて類似することから、本鋳型では、主にコバルト着色の紺色カリガラス小玉を原料として生産していたと考えられる（田村 2012）。

関東では千葉県四街道市川戸下遺跡、木更津市鶴ヶ岡 1 号墳、神奈川県横浜市港北区新吉田東表採、東京都北区豊島馬場遺跡、板橋区松月院境内遺跡、反町遺跡の 6 遺跡から出土している。

川戸下遺跡（新井他 1982、中島 1994）の第 2 号住居跡内から検出された鋳型は、308 個の型孔が残存している。軸孔は裏面に貫通していない。時期は、古墳時代前期の 4 世紀前半と考えられる。

鶴ヶ岡 1 号墳（酒巻忠史 1995）から出土した鋳型は、墳丘内や墳丘を破壊する近世の溝跡から 2 点出土した。軸孔は裏面まで貫通していない。また、軸孔内に、断面が五角形の芯材の残存が確

認されている。古墳主体部からは、鋳型で製作された紺色ガラス小玉 198 点と、この他に、刀子 2 点、青色ガラス小玉 17 点、蛇紋岩製管玉 2 点、翡翠製勾玉 4 点が出土している。古墳の築造は、4 世紀中葉前後とされている。

神奈川県横浜市港北区新吉田東の畑地から表採（古屋他 2010）された鋳型は、軸孔の裏面まで貫通している。表採のため時期は不明である。

松月院境内遺跡（隅田他 1998）から出土した鋳型は、遺構外から検出されている。軸孔は裏面に貫通し、時期は不明である。

豊島馬場遺跡の鋳型は、周溝持建物跡の周溝部分と遺構外から出土した。時期は 4 世紀である。

関東の出土例のうち、時期が特定できる鋳型は、4 世紀代のものである。共通する特徴は、型孔が並列して開けられていること、形状が方形であると推定されること。軸孔が裏面に貫通しないことがあげられる。また、型孔や軸孔の径に大きな差は見られない。

関東以外の古墳時代前期の出土例は、福岡県福岡市西新町遺跡が知られるのみである（重藤他 2000・吉田他 2003）。遺跡からは多くの朝鮮半島形土器が出土することから、鋳型は、形状や製作技法が朝鮮半島で出土しているガラス小玉鋳型と類似することが指摘されている。鋳型の形状は方形で、型孔が直線的に開くことや、型孔や軸孔の径、鋳型の厚さ縁辺部が薄く、中央が厚くなるなど関東地方の例と共通点も多いが、軸孔が裏面に貫通している点が異なり、朝鮮半島の出土例は軸孔が貫通する例が多いようである。

古墳時代前期の鋳型は、西新町遺跡以外に、関東地方のみに分布している。関東地方で独自に発生したとは考えにくく、ガラス小玉鋳型がどのようにして関東地方にもたらされたか注目される。

5 玉作りとその背景

（1）河川交通の発達

反町遺跡や前原遺跡における玉類の製作は、玉

水晶製品を製作する主な玉作り工房

遺跡名	所在地	時期	
奈良岡遺跡	京都府 弥栄町	弥生時代	小玉
西高江遺跡	鳥取県 大栄町	弥生時代	小玉
平所遺跡	島根県 矢田町	弥生時代	小玉
反町遺跡	埼玉県 東松山市	4世紀	勾玉
御岳田遺跡	山梨県 甲府市	5世紀	不明
一反通遺跡	三重県 鈴鹿市	不明	不明
青谷遺跡	三重県 鈴鹿市	不明	不明
岸岡山Ⅲ遺跡	三重県 鈴鹿市	不明	不明

水晶製品が副葬されている主な古墳(埼玉県)

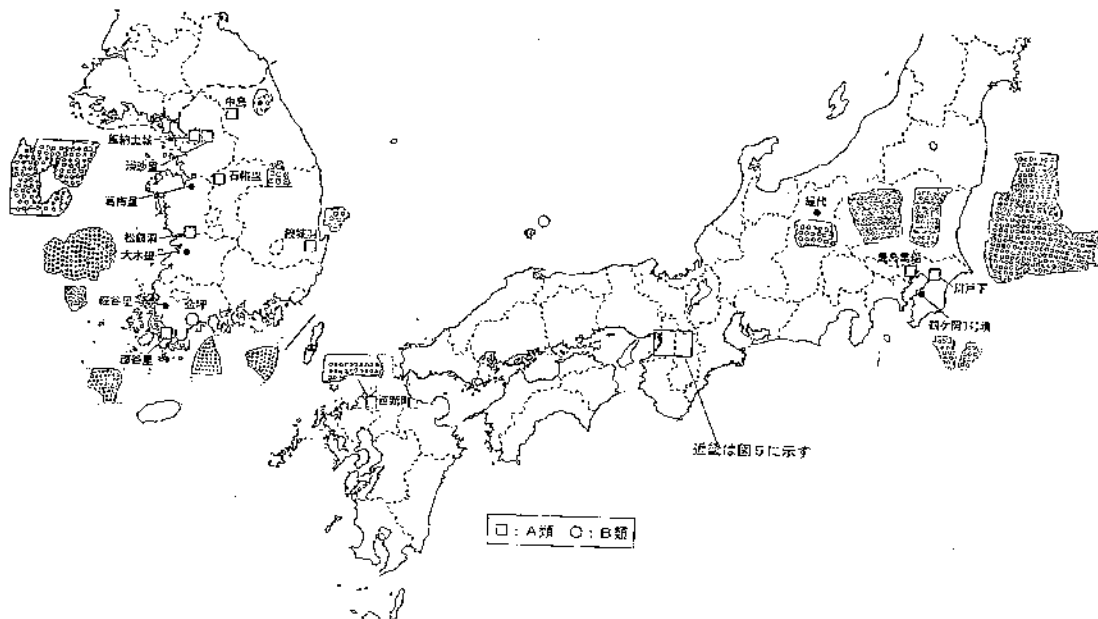
遺跡名	所在地	時期	
城髪山古墳	埼玉県 桶川市	6世紀	切子玉
西台古墳	埼玉県 桶川市	6世紀	切子玉
原山古墳	埼玉県 桶川市	6世紀	切子玉
冑塚古墳	埼玉県 東松山市	6世紀	勾玉
附川1号墳	埼玉県 東松山市	6世紀	切子玉
宮戸古墳	埼玉県 鴻巣市	6世紀	切子玉
坂戸古墳	埼玉県 坂戸市	7世紀	切子玉
下小坂古墳	埼玉県 川越市	6世紀	小玉

古墳時代前期の水晶製勾玉出土遺跡・古墳(東日本)

遺跡名	所在地	時期	
神明ヶ谷戸8号墳	埼玉県 美里町	4世紀後半	方形周溝墓
反町遺跡	埼玉県 東松山	4世紀後半	玉作工房跡
高坂8号墳	埼玉県 東松山市	4世紀後半	前方後方墳
八幡遺跡	埼玉県 東松山市	4世紀後半	竪穴住居跡
面野井11号墳	茨城県 筑波市	4世紀	方形周溝墓
間見穴2号墳	千葉県 八千代市		
島戸境1号墳	千葉県 山武町	4世紀後半	円墳
新皇塚古墳	千葉県 市原市	4世紀後半	前方後方墳
俵ヶ谷4号墳	千葉県 木更津市	4世紀後半	方墳
多古台1号墳	千葉県 多古町	4世紀末	円墳?
真土大塚山古墳	神奈川県 平塚市	4世紀後半	前方後方墳
甲斐銚子塚古墳	山梨県 甲府市	4世紀後半	前方後円墳
小深田西古墳	静岡県 焼津市		方墳
若王子1号墳	静岡県 藤枝市	4世紀後半	円墳
釣瓶落14号墳	静岡県 藤枝市		円墳
東浦1号墳	静岡県 藤枝市		
東山6号墳	静岡県 袋井市		

遺跡名	主な出土遺物
神明ヶ谷戸遺跡	水晶製勾玉1・滑石製? 勾玉1・緑色凝灰岩製管玉5・滑石製? 管玉1・丸玉1
高坂8号墳	振文鏡・ヤリガンナ1・水晶製勾玉1・緑色凝灰岩製管玉15
八幡遺跡	水晶製勾玉1
熊野神社古墳	硬玉勾玉4・瑠璃勾玉2・瑠璃橐玉1・碧玉算盤玉1・碧玉管玉67・瑠璃小玉10・石釧6・碧玉紡錘車形石製品4・滑石紡錘車形石製品1・碧玉巴形石製品2・碧玉筒形石製品4・筒形銅器1
島戸境1号墳	振文鏡・内行花文鏡・珠文鏡・硬玉3・瑠璃5・琥珀2・水晶2の勾玉、緑色凝灰岩管玉35・水晶橐玉4・ガラス小
新皇塚古墳	内行花文鏡・碧玉製管玉・水晶勾玉・琥珀製勾玉・石釧・鉄剣・鎌・刀子・錐・ヤリガンナ・斧
俵ヶ谷4号墳	振文鏡、第1主体部:碧玉管玉3・ガラス小玉49・鏡片、第2主体部:水晶製勾玉1、碧玉製管玉11、ガラス小玉
多古台1号墳	重圈紋鏡、石釧1管玉2ガラス小玉17
真土大塚山古墳	西主体部:三角縁四神二獣鏡・銅鍬50・巴形銅器4・直刀3・刀子4・鉄斧2・管玉1 東主体部:四獣鏡・銅鍬1・ヤリガンナ1・水晶製勾玉1・水晶製ソロバン玉2・碧玉製管玉1・ガラス小玉84
甲斐銚子塚古墳	三角縁神人車馬画像鏡1・内行花文鏡1・龍鏡1・三角縁獣文帯三神三獣鏡1・半円方格帯環状乳神獣鏡1・水晶製勾玉4、碧玉製管玉、車輪石6、鉄刀4、鉄剣3、鉄鍬片、短冊形鉄斧、腕輪形石製品1、石釧(いしくしろ)・貝釧、杵形木製品

第 12 図 水晶製品出土遺跡一覧



第 13 図 ガラス小玉鑄型の出土分布図(京嶋 2009)

作り工人により在地での製作にあたった痕跡と捉えることができる。4 世紀後半の関東では、ヤマト王権によって玉製品が下賜されるのではなく、工人を派遣し、地域首長のもとで玉製作が行われていた。こうした現象は、玉作り工人の関東への拡散を意味している。神奈川県海老名本郷遺跡、茨城県の烏山遺跡、八幡協遺跡など玉作り遺跡が各地に存在する。また、関東における玉作り遺跡は古墳時代前期の 4 世紀の時期に出現する共通点をもつ。工人は畿内と関係の強い地域首長のもとで製作し、製作された玉は地域首長から在地首長に下賜され、在地支配の保持につながったと考えられる。

反町遺跡の比企地域では、野本將軍塚古墳が地域首長と捉えられ、諏訪山古墳群や高坂古墳群は在地首長の可能性を想定したい。また、桶川市の熊野神社古墳からは、畿内系の玉類が副葬されている点で荒川流域の地域首長として捉えることができる。

3 世紀後半から 4 世紀にかけて拠点地域として位置付けられる荒川中・下流域の比企地域には前方後方墳が多く築造され、県北部の小山川・志度川流域の児玉地域には、前方後方形周溝墓が築造されている。これらの地域は、河川交通の発達とともに東海地域との交流が活発化し、河川流域の低地開発が進められたと考えられる。反町遺跡のある比企地域は東京湾から入間川を経て都幾川、市ノ川、越辺川流域の低地開発が、また、正直遺跡、前原遺跡のある荒川流域は東京湾から遡上し、流域の低地開発が背景にあったと考えられる。一方、児玉地域は東京湾から古利根川を経て小山川、志戸川、身馴川流域の開発にあったと考えられる。古墳時代前期には河川交通によって南関東、東海地域、畿内地域と繋がっていたと考えられる。

(2) 朝鮮半島の影響

水晶製勾玉やガラス小玉の鋳型は、関東地方の玉作において極めて特徴的であり、半島の影響が

強いと考えられる。

朝鮮半島における水晶製勾玉は、3 世紀前半に出現する（高久 2000）。任那・伽耶地域（弁韓）では釜山老圃洞 8 号墓、良洞里 235 号などで、新羅地域（辰韓）では慶州徳川里 19 号墓などで出土し、先で述べた国内の出土例より古いと考えられる。また、朝鮮半島におけるガラス小玉の鋳型は、11 遺跡、19 点以上が報告され（京嶋 2009）、1 世紀の漢沙里遺跡、1～3 世紀の中島遺跡、3 世紀後半～4 世紀の松鶴洞遺跡、隍城洞遺跡、葛梅里遺跡、大木里遺跡、郡谷里遺跡などで出土し、国内の出土例より古いと考えられる。さらに、4 世紀後半の石帳里遺跡、金坪遺跡などは、国内の出土例と同時期である。

朝鮮半島の文化の影響が強い新たな集団の存在が考えられる。玉作り遺跡は、初期ヤマト王権がどのようにして関東地域に進出してきたのかを考える貴重な遺跡である。

注

注 1 上野真由美によって、反町遺跡出土の水晶製勾玉と緑色凝灰岩製管玉の製作工程が明らかにされ、分析内容をそのまま記述している。

注 2 大屋道則は、2016『研究紀要』第 30 号に分析成果を詳細に報告している。

注 3 山田琴子は、大屋の分析結果をもとに、第 1 回古代歴史文化協議会講演会 2015「埼玉県の玉作り遺跡について」『古墳時代の玉作りと神まつり』および、第 2 回研究集会 2015「古墳時代の玉類」にける埼玉県報告発表要旨で発表している。

注 4 高坂 8 号墳の報告書は未刊行であるが、佐藤幸恵 2015 の内容による。

注 5 大賀克彦 2012 で塚越古墳出土の管玉分析で、法量分布により在地製品の可能性を指摘している。

注 6 高坂 8 号墳は東松山市教育委員会宮島氏のご厚意による、また、神明ヶ谷戸 8 号周溝墓は美里町教育委員会池田氏のご厚意によるもので、筆者が実見し法量計測を基に示した。いずれも未報告である。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 田中広明 大谷徹 上野真由美 2011『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集
- 阿部寿彦 2005『四街道市内遺跡発掘調査報告書』四街道市教育委員会
- 新井和之 1982「川戸下遺跡」『北総線』東京電力北総線遺跡調査会 四街道市教育委員会
- 上野真由美 田村朋美 2012「埼玉県反町遺跡出土のガラス小玉とガラス小玉鋳型について」『研究紀要』第26号
(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 上野真由美 大屋道則 2014「水晶製勾玉の製作工程」『研究紀要』第28号 (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 上野真由美 2016「玉作集団の遺跡」『埼玉の考古学入門』
- 大賀克彦 2016「つくば市面野井古墳群の再検討」『東生』第5号 東日本古墳確立期土器検討会
- 大賀克彦 2012「塚越古墳出土の玉類の評価」『塚越古墳』神奈川県平塚市教育委員会
- 大賀克彦 2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』No.566
- 大賀克彦 2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』
- 大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』(『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V)
- 大屋道則他 2016「埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉」『研究紀要』第30号 (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 河村好光 2010『倭の玉器 玉つくり倭国の時代』
- 京嶋 覚 2009「ガラス小玉鋳型出土の意義」『古代学研究』182号
- 肥塚 隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財』No.566
- 小林三郎・中島広顕 1995『豊島馬場遺跡』東京都北区教育委員会
- 酒巻忠史 1995『桜ヶ丘遺跡発掘調査報告書』一鶴ヶ岡1号墳・鶴ヶ岡遺跡・俵ヶ谷遺跡一木更津市教育委員会
- 酒巻忠史 2002「鋳造技法によるガラス小玉の特徴と類例」『国学院大学考古学資料館紀要』第18輯 国学院大学
資料館
- 佐藤幸恵 2015「東松山市で三角縁神獣鏡が発見されたことについて」『三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山』東松
山市教育委員会
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2015『見えてきた古墳時代の幕開け』
- 塩谷 修 1993「土浦市烏山遺跡出土の管玉未成品」『土浦市立博物館紀要』第5号
- 白石太一郎 2013『日本歴史私の最新講義 07 古墳からみた倭国の形成と展開』敬文舎
田中清美 2007「「たこ焼き
型鋳型」によるガラス小玉の生産」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号
- 田中史生 2002『倭国と東アジア』「渡来人と王権・地域」日本の時代史2 吉川弘文館
- 中村大介 2013「朝鮮半島の玉文化研究の展望」『玉文化』第10号
- 寺村光晴 1966『古代玉作の研究』
- 寺村光晴編 2004『日本玉作大観』
- 平塚市博物館市史編さん『平塚市史』11上 別冊考古(1)
- 福田聖 上野真由美 2012『反町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第393集
- 美里町史編纂委員会『美里町史』通史編
- 米田克彦 1998「出雲における古墳時代の玉生産」『島根考古学会誌』15
- 米田克彦 2009「考古学から見た出雲玉作の系譜」『出雲古代史研究』19
- 米田克彦 2009「穿孔技術から見た出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究』
- 米田克彦 2013「古墳時代玉文化研究の展望」『玉文化』第10号
- 山田琴子 2015「埼玉県の玉作り遺跡について」『古墳時代の玉作りと神まつり』古代歴史文化協議会
- 若狭 徹 2017『前方後円墳と東国社会 古墳時代』古代の東国1 吉川弘文館